國學院大學学術情報リポジトリ

明治期イギリス人の神道論に関する一考察：Ｗ・Ｇ・アストン『神道』について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐藤, 一伯
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000993

明治期イギリス人の神道論に関する一考察

――W・G・アストン『神道』について――

佐藤一伯

はじめに

イギリスの外交官であり日本学者のウィリアム・ジョージ・アストン（一八四一～一九一一）は、アーネスト・サトウ、バジル・ホール・チェンバレンとともに、明治時代のイギリス人三大日本学者に挙げられる。北アイルランドで生まれ、クイーンズ大学卒業後に日本のイギリス領事館の日本語見習通訳、のちイギリス公使館の日本語書記官となり、この間に朝鮮のイギリス総領事も勤めた。編著書・訳書に『日本語口語小文典』（一八六九年）、『日本語文語文典』（一八七二年）、『日本紀』（一八九六年）、『英文日本文学史』（一八九九年）、『神道』（一九〇五年）などがある。

アストンの生涯と業績に関する伝記的研究に、楠家重敏氏の労作『W・G・アストン――日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』（雄松堂出版、二〇〇五年）がある。同書によると、アストンは一八六四年（元治元）十一月の初来日以来、イギリス外交官として活躍するかたわら、一八七二年（明治五）に設立された日本アジア協会を舞台にサトウ、チェ

ンバレンらと日本研究に努め、日本学者として大きな業績を残した。その研究は一八八九年（明治二十二）の外交官退職と最終離日を境に前後二期に大別され、前期の特徴は『日本語口語文典』『日本語文語文典』の二つを中心にした日本語研究、日本アジア協会での日本文化研究にあり、後期には『英訳日本紀』、『英文日本文学史』、『神道』などの大作が著され、母国イギリスにおいて円熟した日本研究が営まれた。

楠家氏の伝記は前期を扱ったものだが、特に日本語研究への日本人の理解（評価）のくだり（第五章）は興味深い。山田孝雄『国語学史要』（昭和十年）に顕著なように、外国人の日本語研究の成果は軽視ないしは無視される傾向があるのに対し、アストンの同時代、国学者の堀秀成は『語格全図略解』（明治二十二年）の総論において、「英人サトウ氏アストン氏の如きは本邦語学を究め然も其学の密にして且精なる普通本邦語学家の及ぶ所にあらず。」と評していた。また大槻文彦は『広日本文典』（明治三十年）で、アストンの『日本語文語文典』の四段古形説を採用している部分があったという。[1]

では、アストンの神道研究は国内外でどのように受け止められてきたのか、これが本稿の課題であり、その一端については拙稿「新渡戸稲造における維新と伝統」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊四五、平成二十年）、「ＧＨＱの神道観に関する一考察」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊四八、平成二十三年）、「アメリカの神道観に関する一考察」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』六、平成二十四年）などに触れてきた。

本稿では特に、アストンの『神道』（及び訳書）[2]の紹介とともに、内容的な特色について若干の確認をしたいと思う。

一、加藤玄智編『欧文神道書籍目録』

加藤玄智編『明治・大正・昭和　神道書籍目録』（明治神宮社務所、昭和二十八年）には、拙著『明治聖徳論の研究――明治神宮の神学』（国書刊行会、平成二十二年）において、明治天皇・昭憲皇太后に関する書籍の調査に取り組む際、多大な示唆と恩恵を受けた。研究当時は大学図書館の参考閲覧室等で手軽に利用できたが、帰郷により環境が変わり、今後の勉強の必要から手元に備えたいと平成二十四年春に古書店より一冊を購入した。幸い保存状態が良好であったばかりでなく、発行当時の推薦文（柳田國男「推称の辞」、河野省三「感激の推薦」、長井眞琴「関係者の一人として」）を収めた印刷物（三つ折りのリーフレット）が挿まっていた。[3] 本稿の趣旨に照らしても貴重な資料と思われるので、ここに順次紹介したい。

まず、柳田國男は「推称の辞」において、「とにかく、画期的文献であることには間違ひない。直接本書に触れて頂けば判ることと思ふが、この様な大部にして、しかも粒々辛苦の果に成つた貴重な学的事業が、はたして今後幾年さきに、再び企てられることであらうか。」と称賛、「国の命脈とも言ふべき広い意味での神道が、時代と動きを共にするとはいへ、その本質までがいはれなくして左右されるものとはどうしても思へない。より立派な御国と成すためにも、是非若い人々が、遠い御先祖より代々受け継ぎ護り育ててきた斯の道に踏み入らんことを望んでやまない。」と神道の研究を提唱し、「本書の寄与するものは洵に大きく、占むる位置も亦大である。……特に若い人々をも含めて大方篤学の皆さんに敢て本書を推す次第である。」と、若者（とくに高校生）にも慣れ親しんでもらいたいと述べている。

リーフレットには柳田國男に次いで、河野省三「感激の推薦」を掲げており、ここではその後半部分を紹介したい。

明治、大正から昭和の初年にかけての日本は、神道思想にとつても、固有文化にとつても、起伏多く意義深い時代であつて、此の間に於ける神道関係の著述は、刊本、写本共に意外に多い。而して明治前期に於ける種々の著書には、当時に於ける日本社会の側面を明らかにし、将来に於ける神社神道の在り方を考へるよりも少なからぬ重要性を有してゐる。而もその調査や研究には可なりの不便が伏在してゐる。本書がそれらに対して寄与する功績は案外に多いことを期待するに十分である。

自主性と特殊性とにも重点を置くべき、今後の内外学徒の日本文化研究にとつて、全く感謝に堪へない読書界、出版界の福音である。私は本書を弘く各方面の知識人、文化機関にお勧めする。

なお、リーフレットには本書籍目録出版に至る経緯を紹介しており、河野氏の推薦文の前半部分と重なる内容なので、参考までに掲げたいと思う。

曩に明治聖徳記念学会が加藤玄智博士を中心に多年辛苦の結果「神道書籍目録」壱巻を上梓頒布致しました。内容は上古以降明治以前に亘る神道関係の文献一切を細大漏らさず収録したもので、特に宗教歴史学会に裨益する所甚大なりとして江湖に歓迎され忽ち版を重ねた次第であります。爾来、明治初年より現代に至る続編の要望随所に起り、同学会は之に応え相次いで鋭意編纂に従事して参りましたが、今回その刊行事業の一切を当明治神宮に於て継続施行致すことになりました。本書の意義深厚遠大なるに思ひを馳せつつ傾倒努力して漸く体裁を整へるに到りました。必ずや同学篤志の方々の要望に叶ふものと確信して居りますので、皆様の机辺の好伴侶として是非壱本お備への程、以上刊行経過の一端を紹介旁々お願ひ申上げます。

最後に、長井眞琴の推薦文「関係者の一人として」の後半部分を紹介する。

ややもして、神道を極限して解釈し勝ちであるが、そんな狭いものではなく、正に神ながらおのづからに生れ

出た国の宗教とも言ふべきものであらうと思ふ。本書もその様な態度で接して頂き度いし、専門外の一般の人々にも広く活用して頂き度いと思つてゐる。直接関係した私から申すのも何んだが、近来の貴重な画期的刊行物として極力推奨致す次第である。

以上、民俗学者の柳田國男、神道学者の河野省三、仏教学者の長井眞琴による推薦文の一部を紹介してきた。この出版物への称賛と神道・日本文化研究の発展への期待の大きさが伝わってくる。

ところで昭和二十八年には加藤玄智編『明治・大正・昭和　神道書籍目録』と同時に、欧文書籍の目録 *A bibliography of Shinto in Western languages, from the oldest times till 1952* (compiled by Genchi Kato, Karl Reitz and Wilhelm Schiffer, Tokyo, Meiji Jingu Shamusho, 1953) が刊行されている。この欧文書籍目録の編集について、林博太郎（財団法人明治聖徳記念学会会長）は昭和十九年六月に著した『明治・大正・昭和　神道書籍目録』の序文で次のように述べている。

尚又爰に特筆して其学労を犒はなければならぬのは若き独逸国の学者カル・ライツ Karl Reitz 君である。同君は加特力教僧であると同時に熱心なる神道研究家であつて、夙に本会々員の列に加ははれ、本書籍目録の編纂に際しては欧語で書かれた内外人の神道書籍目録を、古代より皇紀二千六百（西暦一九四〇）年記念の年、即ち昭和十五年に亙つて隈なく探索して本書の附篇とせられた事である。本書の姉妹篇の前書たる神道書籍目録（明治元年迄のもの）には追つて此事あるを予想して欧文で出された神道書籍目録を附することは一切中止して其後篇たる本書の刊行迄延期しておいたのを一切網羅して掲出し今日迄絶無僅有の欧文目録の出来たといふのはその一小部分は会員安津素彦氏の外助もあつたが、主としてカル・ライツ君の独力に成る学労の花実である。故に此事を茲に特記して同君に心からなる謝意を表する。(4)

同じく昭和二十八年九月に加藤玄智が著した序文には次のように触れている。

更に私は、欧米各国に於て、英独仏露伊等の語を以て発表された、古今の欧語神道文献の書籍目録の編集をも思ひ立ち、カル・ライツ博士を主任とし、昭和十五年（西暦一九四〇年）迄のものを同研究所に於て編集済であつたが、今回更に、上智大学教授ヴィルヘルム・シファー博士が専任増補された、それ以後、昭和二十七年（西暦一九五二年）迄のものを追加し、「明治・大正・昭和神道書籍目録」同様、近く神宮に於て公刊されることになつておる。茲にライツ、シファー両博士に対し、満腔の謝意を表する。(5)

林、加藤両氏の序文から、『欧文神道書籍目録』は明治聖徳記念学会における『神道書籍目録』、『明治・大正・昭和　神道書籍目録』の編纂事業の一環として進められたものであったことがわかる。なお、欧文目録の表紙のデザインは日本画家の遠藤教三が手がけている。

二、アストン『神道』と補永茂助・芝野六助訳『日本神道論』

W・G・アストンの神道研究の代表作『神道』（一九〇五年）について、加藤玄智らが編んだ欧文神道書籍目録には、「Shinto, or the Way of the Gods. London, 1905.」と掲載している。(6) 架蔵本（*Shinto* (*the Way of the Gods*), by W.G. Aston, London; Longmans, Green, and Co., 1905.）の目次は次の通りである。

Table of Contents

I. Materials for the Study of Shinto
II. General Features—Personification

Ⅲ. General Features—Deification of Men
Ⅳ. General Features—Functions of Gods, etc.
Ⅴ. Myth
Ⅵ. The Mythical Narrative
Ⅶ. The Pantheon—Nature-Deities
Ⅷ. The Pantheon—Man-Deities.
Ⅸ. The Priesthood
Ⅹ. Worship
Ⅺ. Morals, Law, and Purity
Ⅻ. Ceremonial
XIII. Magic, Divination, Inspiration
XIV. Decay of Shinto. Modern Sects

W・G・アストン『神道』（一九〇五年）の日本語訳には、補永茂助・芝野六助訳『日本神道論』（明治書院、大正十一年）と、安田一郎訳『神道』（青土社、昭和六十三年）がある。本稿ではそのうち大正十一年発行の『日本神道論』を紹介していきたい。

同書は上製本・四六判・本文四五四頁で、目次は次の通りである。

〔図版〕アストン博士肖像、原著者からの手紙、翻訳神道に対する原著者の序文

凡例

序言
著者略伝
序　文
第一章　神道の研究に必要な材料
第二章　総論――擬人法
第三章　総論――人を神にすること
第四章　総論――神の職分
第五章　神話
第六章　日本の神話
第七章　多神論――自然神
第八章　多神論――人間神
第九章　祭官
第十章　崇拝
第十一章　道徳、法律及び潔斎
第十二章　儀式
第十三章　禁厭・卜占・霊感
第十四章　神道の衰頽、近世の諸流派

巻頭にはアストンの肖像の図版、訳者の一人・芝野六助宛の手紙（一九〇八年六月二十六日）の図版と訳文、翻訳

神道にアストンが寄せた序文（一九〇九年二月一日）の図版と訳文が掲載されている。芝野宛「原著者からの手紙」でアストンは、「私は此の翻訳があなたに取つて甚だ有利な御企とは考へませぬ。随つてあなたに対し、何等煩しい条件を設けることは欲しませぬ。もしあなたが適当だと思召すならば御随意に翻訳を出版せられてよろしう御座います。」と書いている。また「翻訳神道に対する原著者の序文」では、「此の機会に於て、余は大学者本居平田に対して熱烈な讃辞と謝意とを表したい。彼等の最も該博な研究の援助が無かつたならば、余の「神道」が、尚更不完全なものと成り了つたことであろうと思ふのである。」と述べ、本居宣長、平田篤胤の国学研究に多大な敬意を払っていたことは特筆しておくべきであろう。

『日本神道論』の大正十一年二月十一日付「訳者の序」（序言）は、「此の「神道論」は西欧はいふに及ばず、我が学者の間に於ても既にクラシックになつてゐる。」として、その特色を次のように述べている。

氏の神道に関する見解は、決して我等日本人が考へるやうな偏狭なものではない。氏の「神道論」は一種の日本民族思想論とも信仰論ともいふべきものである。即ち此の書は、日本人の言語、文学、思想、信仰、風俗、習慣等あらゆる方面をば内的にも外的にも研究した結晶である。随つて此の書は現代日本人の内面的生活に対つてサイドライトを投げ与へたものが少くない。さうして、この科学的批判的な研究物をば、文学的に趣味多く叙述して居ることと、日本の神話伝説をば、広く羅馬、埃及等の神話伝説に比較してゐることとが、本書の二大特色である。

また「氏が日本に関する諸研究の一大統計、集大成である。或は文学の方面から、或は思想風俗の上から、日本の神道をば立証し、説明し、……其の研究其の説明がいかにも精到である、広汎である。これ実に又本書の一大特色」とすべきであり、さらに、

日本人は或意味に於て神の子である。其の日常生活の中に神代の手ぶりを少からず伝へのこしてゐる。そこで我等は神道を研究するに於て、その研究が甚だ容易であると同時に、時としては又神道上非常に必要な事柄も之を日常の茶飯事として軽視し去り、或は又これが意識に上らずして終ることが往々あるのである。故に今後の神道研究は、宜しく注意して、本居、平田などの諸先輩のせられた如き古来の伝統的研究法に加ふるに、更に又、何の斟酌もなく、何の拘束もなく、因習に捉はれず、自由に、赤裸々に、露骨に、無遠慮に、深刻に、日本人といふ考慮を皆無にして、胸に一点先入物なき、所謂白紙主義を以て、腕ら外国人となつて研究する研究法を以てしなければならないと確信する。アストン氏の本書の他の一大特色は、即ちこの外国人的方面を遺憾なく発揮して研究してゐる点である。本書の論説にして、思はず案を打つて「痛快だ！」と叫ぶことを禁じ得ないものが、屢々あるのは即ち此の為めである。

と述べている。

三、アストン『神道』の内容

ウィリアム・ジョージ・アストンは『神道』（一九〇五年）の「序文」において、

私の此の論文には二個の目的がある。即ち宗教の科学的研究用として、神道の最も重要な事件の索引を作ると同時に、宗教の一形式と宗教の初歩とを特に神道について陳べようとするのである。而して此の問題を取扱ふに於て、消極的、懐疑的態度でなくして、積極的態度を以て、凡て宗教なるものは、人間の病的作用のものではなく、常規を失はぬ人間の精神作用から起るものだといふ見地を以てした。（二頁）

と、神道の研究に「消極的、懐疑的」（negative or agnostic）ではなく「積極的」（positive）な立場で臨み、その際に「大陸の学者 Reville〔レヴィユ〕、Goblet D' Alviella〔ゴブレット・ダルヴィエラ〕、Pfleiderer〔プライデラー〕の諸氏に負ふところが甚だ多い」こと、さらに「人類学的事項については、Dr. Tylor〔エドワード・バーネット・タイラー博士〕の「Primitive Culture」〔『原始文化』〕及び J. G. Frazer〔ジェイムズ・ジョージ・フレイザー〕の「Golden Bough」〔『金枝篇』〕に頼る処が大にある。」と述べている。

第一章では「先史時代の神道」「古事記」「日本紀」「旧事紀」「出雲風土記」「古語拾遺」「姓氏録」「延喜式」「本居と平田」の各項（小見出し）を設けて解説の後、次のように古代神道の「国家的宗教」の特色を指摘している。

以上述べた書物は古神道の研究にかなり富んでをる。此等の書を見ると、日本人自身が此の神道といふ宗教を如何に見て居るかが知れる利益がある。さうして近世に於ける西洋思想及び基督教の観念を知らず識らず雑へて説くより起るが如き過失がない。此等の記録の主として語る処によりて、神道は国家的宗教〔the State religion〕であることが察しられる。当時の民間信仰と行事〔the popular beliefs and practices〕は、此等の記録に見ゆる処がまことに鮮い。（七頁）

さらに「風俗画報」について、「近頃出る絵画の雑誌で、近世の神道、民間伝説、迷信等に関する記事に充ちてゐる。」と評している。

第二章では、「宗教」「宗教の一要素たる情操」「宗教の智的根拠、神の観念」、「神」、「宗教的思想の二重の流れ」、「神の分類」、「概念上の形式」、「霊魂説」、「団体の神と性質の神」の各項を説明し、次のように述べている。

日本語には抽象的言語が著しく欠乏してをる。だから抽象的性質の擬人法には制限がある。希臘、羅馬の神話の数多き擬人的抽象と較べるものが、日本神話には殆ど無い。自然物の創造生成の勢力をば擬人法にした伊佐那

岐命伊佐那美命は、多分日本の創造ではなくて支那哲学の陰陽より取った神である。自分は生成の神なる産霊神も本源は支那思想に遡ることは出来はせぬかと思つて居る。（四九頁）

第三章では、「人間を神にすることが神道に於て重要な事であることは、西洋の学者からも、近世の日本人からも誇大に説かれた。……実際神道は宗教的思想の二大潮流の中、第一の方〔自然崇拝〕よりも、第二の方〔人間崇拝〕から発して居ることは比較的に少い。即ち人間崇拝の方が寧ろ僅かである。」（四九～五〇頁）と、従来の学説に批判的な立場を述べている。また「祖先崇拝」についても、「此の語に制限を附けて、我が自身の先祖を祭るのだと言ふ時には、宗教の此の形式は殆ど神道に其の余地を占めないのである。近頃の場合を除き、外国思想の影響を除けば此の崇拝は唯一つある。それは天皇（ミカド）の祖先の崇拝である。併しそれすらも第六世紀以前にはこの事があつたか否やはたしかで無い。」（六〇頁）と捉えている。

さらに、「人を神にする根本の理由は、其の人の生前の性質等に誇大に附加へた評価から起るのである。」（六一頁）といい、「我等は注意して、述語を使用するならば、自然神と団体の中心人物とを先祖と呼ぶことは、実の祖先崇拝ではなくて、准祖先崇拝〔puseudo-ancestor-worship 疑似祖先崇拝〕と呼ぶべきである。」（六三頁）と指摘している。

第四章では、神道の神への祈りについて次のように観察している。

自然神は其の固有の自然の職分にのみ拘はつてをることが稀である。神道では神が人間を保護する傾向がますます生じて来ることを示してをる。古神道の中にさへ、神が其の神特有の義務の外に人間を加護したことの実例が沢山にある。日の女神は世界に光を与ふるのみならず、其の神が愛する人間のために五穀の種を供給し、特に子孫なる天皇の幸福を守つてゐる。風雨に人格を附けてこしらへた須佐之男之命は有用なる種々の材木の供給者である。事実上すべての神が豊年のために雨のために祈られた。人間神の天満宮にさへも亦之を祈つた。どの神

も地震を起し、疫病をはやらせることが出来る。（八七頁）

また、「神道の多神教的性質」の項では、

神道の如き性質を有する自然崇拝は多神教なることは止むを得ない。太陽の如き只一つの自然神を崇拝することは之を思考することが出来る。但し、自然物又は自然の現象を、人間に擬するところの創造力は実際決してそればかりで活動がやむものではない。生命を有つた万物は蓋し一神教的自然神である。但し、此の思想には古代日本人が有つてをつたよりも大きな科学的知識の分量が必要である。彼等は只不充分なきれぎれな、きれいな幻影の光を持つてをるばかりである。（八八頁）

と多神教的信仰を説明し、「「最上神に於ける信仰は避け難いものである」と言つたマックス・ミュラーの説は神道の事実には当てはまらないのである。」（九二頁）と述べている。章の結びでも神道では「無限無窮といふ語は……無限の時間をいふ」のであって、「天皇の子孫の無窮であるといふこと」「永久の夜（トコヤミ）といふこと」は聞くが、ミュラーの「無限のものを了解する才能が無ければそこに宗教があり得ぬ」という、「超越的なること、即ち人智人力の超越してをること」を宗教の定義とする説は当てはまらないと批判している。

第五章では宗教的神話を研究する意義について、「神話は比喩から発達したものであるが、その比喩の如く、真実でないものによつて真実を暗示するものであつて、宗教的教育に必要なものであることは既に承認せられて居る。言語の幼稚な時代には、霊魂上の真理を説明するのに有形的表象――言ひかへれば、神話と比喩以外には方法がないのである。」（一〇〇頁）と、霊魂観の「有形的表象〔physical symbols〕」との見方を示し、日本の「神話」における真理について、次のように述べている。

日本神話に伏在する主要な観念は、第一には宇宙の万物は感情的生命を有つた本能的の生物で、人間に対して

は仁愛的思慮を廻らしつつあるといふことである。（此の観念は不十分ではあるがやや真理がある。）次には、其のめぐみをして太陽の光と熱との如く人民の上に降らしめる君主を尊敬し服従すべしといふ教である。其の神話に実際この事を記してをる。そこで日本歴代の君主は日の女神の子孫だとせられてゐると思ふ。これが即ち君主の神的威光に関する日本主義の述べ方である。これらの生気ある要素が無かつたならば、日本神話は或学者が想像した通り荒唐無稽の混体に過ぎず、其の研究は生理学的で無く、精神病的となるのである。（一〇九頁）

第六章では「日本の神話」について、「日本の古い神話の観念を十分得るには、記事が固より重複、矛盾、曖昧なことを含んではゐるが、記紀旧事記の直接研究を外にしては決して得られないのである。」（一一一頁）と述べた上で、「日本の混沌の中から神が生れたといふ話」に次いで「神世七代と呼ばれる時代」に触れ、「これらの神の多くは、農業国民に大に必要なる、発生といふことについての神秘的な順序について注意して居ることを示すのである。」（一一四頁）と述べている。

さらに、「第七代の神は伊佐那岐命、伊佐那美命の二神である。日本の神話は実はこの二神からはじまるのである。」（一一四～一一五頁）といい、また「天の岩戸神話」について「此の物語は、日本神話中最も重要な部分である。これは、光明と暗黒との神話に属するもので歴代の朝廷にて行はれる神道の或る主要な儀式の始だといはれる。」（一三二頁）と指摘、さらに須佐之男命、大名持命、邇々杵命、経津主神と武甕槌神、火須勢理命と火火出見命、神武天皇の諸伝承を説明している。

第七章では、「日の女神」〔The Sun-Goddess〕が「神道中最も尊い神」であり、なぜなら、

太古の日本人は甚だ不十分な又きれぎれな風俗の中に、且つ彼等が直接に影響を受けつつある物理的現象の中に、殆ど専ら自然の神威を認めた。就中太陽の温熱と光線と彼等が日常の食物の本源とが第一位を占めてをる。

日本に太陽崇拝のあるのは、農業国民たる彼等には特に自然なことである。農夫の仕事の殆どすべてが、此の太陽をたのみ、太陽から支配せられてをるのである。（一五七～一五八頁）

と、日本の太陽信仰が「農業国民」として自然なことであると述べている。

また、「アマテラス即ち天照大神の太陽的性質が不明瞭になつたので、日本人は日輪様、又はお天道様の名の下に太陽をば更に新たに擬人した。」（一六五頁）と神観念の展開について触れ、その道徳的な面について次のように述べている。

神道は組織立つた道徳は含まないが、其の古い神話で話した如く、日の女神の性質の中に道徳的要素が少なからずある。日の女神は其の悪戯な素盞嗚尊のことについて勇気と寛容の徳を備へて居ることが察しられる。又月神が食物の神を殺したのを怒つて御自身の面前から追放した。又其の人間を愛護する徳のあることは五穀の種有用の食物を保存し又播種の法を彼等に示したことによつて証せられる。又岩戸から出て来られた時、神々人々のよろこんだのを見れば、日の女神が慈善心に富んで居られたことも肯かれる。（一六九～一七〇頁）

第八章では「人間神」を「個人を神として祀ること」（タケミナカタノ神、八幡、天満宮）、「団体の神」（日の女神補佐の神、中臣家の祖兒屋命、太玉、ウズメ、石凝姥命、豊玉、事代主、少彦名）、「人間的性質を抽象してこしらへた神」（塞の神、鬼、幸運の神・悪運の神）の三節に別けて取り上げている。

このうち、「天満宮」で次のように述べている。

日本人が孔子の釈尊をもつとめるが、もし自国の神を文学の神に祭ることをしなかつたならば、此の釈尊が大に盛になつて居るだらう。道真に自然的威力を附加して居るのは、神に崇める行為中実質的部分であることが察しられる。其の人を神とする経路は感謝と恐怖とのかはるがはる影響した結果に基いてゐるものである。（二三三

頁）

第九章では、「神道はハーバート・スペンサーの言つた下の原理を説明してゐる。それは「社会進化の初の段階に於ては、人事と神事とに幾んど区別が無い」といふことである。天皇は最高の祭官でもあり、同時に帝王でもあつた。人事と宗教的儀式との間に明かな区別がなかつた。」（二五二頁）と述べ、天皇、中臣、忌部、占部、祭主、大宮司、神主、祝部、禰宜、造、女神官、斎王、神子、市子、神戸について説明している。

第十章では、「宗教的行為は、崇拝、宗教的制裁を有して居る限りについていふ道徳、儀式的清浄の三つを含む。」として、そのうちの「崇拝」ついて触れている。「崇拝」という語は「人に対する尊敬礼譲と神に対する崇拝とに適用」し、「神に対する崇拝は実は尊敬の別種ではなくて之を新方面に応用したものである。神を拝むほとんどすべての形式は、社会的尊敬の形式を借りたものである。」（二六一頁）と、対人の「社会的尊敬の形式」を「新方面に応用したもの」と捉え、さらに「崇拝は人から人へ、又一時代から他の時代へ宗教的思想感情を通はす方法」（二六三頁）であり、「神に対するのみならず人間仲間に対して行はれる」「重大な職分」があるとも述べている。

「供物」の項ではハーバート・スペンサーの「供物をする起りは、死人の墓に飲食物を遺つた風習が起原である。かくて先祖の霊が神の資格に昇るにしたがつて、死人にとて遺つた飲食物はやがて供物となつたのである。」という意見が「其の宗教起原論と一致する」と言い、「供物の起りは、報本反始の心を以て分けて置いた通常の肉の一片にあつたのであろうと思ふ。」（二六六頁）と述べ、その目的を次のように捉えている。

供物をする普通の目的は、神に対する感謝でる。祝詞に神の恩を報いるがため、将来の幸福を授けて貰はんがために供物をすることが甚だ多い。（祈年祭祝詞を見よ）又供物は謝罪のためにする時もある。儀式に記されてゐる罪ケガレを免かれるためにする時もある。故に供物のことを償物（アガモノ）ともいふのである。（二六七頁）

このほか、「人身御供〔Human sacrifices〕は、古書に見えた国家的神道〔the State Shinto religion〕の一部となつてゐない。併し、太古には実際これがあつたことが察しられる。」（二七五頁）という「国家的神道（国家神道）」の用例も注目される。

第十一章では、神道の「道徳」について「道徳律の性質を備へたものは幾んど無い。……神道の聖書には直接に道徳を教へて居ない。毎年両度に行はれる大祓の祝詞の中にある罪名の中には、いはゆる十戒中の一戒をも含んでゐない。」（『日本神道論』、三〇二頁）と古代の状況を述べている。聖徳太子の十七条憲法は、「内容はすべて官吏の心得を書いたもので、上下和合、仏法の尊信、君臣の信義、官吏の精励、上下有礼、愛民」など中国思想に拠るものであるが、「併し日本の実情に必要なしに作られるものでないことは確かである。……此の当時既に日本に不文律が有つて、不完全ながらも、罪を裁定したことが察しられる。」（三〇五頁）と、日本の実情の反映したものであることを推察している。

また「儀式的潔斎」の項で、日本における「罪」について次のように述べている。

神を怒らせる所為をば、日本では罪といふ。神の崇拝者がかかる所為を避けるのを忌（イミ）といふ。本居の解釈によれば、神道の罪に三種ある。即ち不潔、罪悪、災難の三つ。儀式上の不潔と道徳的罪過（或特別なる種類の）とは、恐らく日本の上古に於ては区別がつかなかつたのである。災難も罪の中に這入つてをる。知る知らぬに拘はらず、罪を犯せば、神が怒つて災を降すから、災難は神の怒つてゐる証拠と見る。すべての罪は宗教的不合格若くは責罰を含んで居る。（三〇七～三〇八頁）

第十二章では、「儀式といふものは前二章で述べた崇拝の要素が或目的のために結合したものである。『延喜式』は、次に掲げる神道の或重大なる儀式に関する主要な典拠である。余は又此処で、Sir E. Satow 氏が亜細亜協会第七巻及

び第九巻に発表せられた研究を自由に借用する。」（三二九頁）と述べて、「大嘗会」「新嘗」「祈年祭」などの諸祭儀を解説している。

第十三章では「まじなひ」について、「日本の辞書学者山田美妙は、まじなひは「神仏のすぐれた力の加護によつて、災難を除くこと」と言つて居るが、チツメルンの説と実質に於て一致して居る。…… Sir Alfred Lyall 及び I. G. Frazer は、「この種のまじなひは宗教よりも先きにあつたもので、過つた前提に基づいては居るが、其の原理に於ては科学と同一のものである」といふ説である。」（三九一～三九二頁）と述べている。

また「神憑」の項では次のように神道の特色を指摘している。

神道は不幸にして、託宣に存する真理を発見するやうな事柄を記したものが無い。太陽を神とすることと、太陽から発する温暖と光明が人に対する慈愛であるといふことの承認とは、実に宗教を欠いてゐる世界に於ける立派な観念である。伊邪那岐命の神話は、諸神が此の神から生れたとして、一神教の方に道を開いた華麗な観念である。生成の神なる産霊神は此の方向に更に進む階段を示すものである。我等が隣人に対して不快なことをすれば、神も之を不愉快とするといふ真理を捉へたものと思はれる。（四一九頁）

第十四章では「仏教の興隆」について「後世の神道は衰頽の歴史である。尤も神道に生気の絶えざるゆゑんは第一神道に接木した仏教の力である。支那の道徳、哲学の影響、特に近世に至っての影響が更に著しい。」（四三〇頁）と仏教の影響の大きさについて指摘し、「両部神道」については次のように述べている。

神仏二教の折衷とはいふものの、両部の精神は本質的に仏教である。神道から採用したものは二三の神の名に過ぎない。就中国常立命が最も著明であるが、此の神とても神道の古書よりすれば、その謂はれのないほどに尊ばれてゐる。……神儒仏を打つて一丸とするためには、いはゆる方便以外に、尚或者があつた。それは実にすべ

ての宗教の本質的統一を求め外形上異つた物をば出来るだけ調和させようとする人間の真実の本能である。日本の宗教史は斯様な尽力に充ちて居る。（小説家馬琴曰く、神道は太陽の道を尊び、支那哲学は天を尊ぶ、釈迦の教に従つても太陽を一つの神とすることは出来るのである。これらの教義が違つては居るがその根本原理は同一であると）（四三四頁）

以下、「唯一神道」、「神道の託宣」（『和論語』）、「純粋神道の復活」、「心学」、「天理教」、「蓮門教」の紹介があり、「国家的神道〔Official Shinto〕」で次のように本書を結んでいる。

現時の国家的神道は実質的に平田本居の唱へた純神道である。併しそれは少しの生気もない。かかる初歩の宗教は、今日日本が達したやうな文明程度の国民の精神的柱とするには全く不十分である。但し、伊勢出雲その他二三社の大祭及び例年の巡拝によつて多少の宗教的熱情が煽動せられることはたしかである。天皇に対して払ふ敬虔の情は、宗教的性質を備へて居る。その敬虔の源は即ち神道から出て来るのである。併し、日本の有する信仰の本流は、それ自身のために自ら新しい溝を掘つた。其の流れは仏教の方へ向かつたのである。王政復古の時、一時衰へて居た仏教が、此の頃は再び興隆し蘇生して来た様子が見える。他の更に恐るべき競争者があらはれた。それが日ましに勢力を逞しくして進歩して行きつつあるが、それが果して那辺に到べきか、予め之に制限をつけることは困難である。

国民的宗教として神道は殆ど滅びた状態である。しかし此の神道は日本の俗説及び習慣の中に生き残り、又更に単純で、且つ一層物質的な方面にあらはれる神に対する日本人の活発な感受性――これは日本人を説明する特徴である――の中に永久に生き残るであらう。（四五三～四五四頁）

四、アストン『神道』の特色――むすびにかえて

アストン『神道』が参照した同時代の日本関係の資料に、第三章の「天皇以外の人を崇むること」を述べた項における、ラフカディオ・ハーンの著述がある。

生ける天皇、崩御の天皇を神に崇むる場合ですら、外国思想の影響を疑ふ余地が沢山ある。天皇以外の人々を神にすることについては、我等は古典の中に一つの明瞭な記事を見出さない。併し『記』『紀』にある数多のあいまいな神の或者には人間神があるだらうと思はれる。此の二書の中にある伝説的歴史的の人物の多数は後世に於て神に祀られたことは明白である。この数が時を経るままに増加した。諏訪の神の場合は殊更に興味がある。此の神の生ける子孫は神として崇められ、一つの洞穴が社殿の代りになつてゐる。出雲の大社の神官の長は生神といはれる。善人悪人ともに崇められて神に斎ひこめられる。或は逆臣将門の如き、強盗熊坂長範の如き、又我等の時代にても森文部大臣の殺害者西野文太郎の如きも。

Lafcadio Hearn は其の著（Gleaning in Buddha Fields）の中に、生きた人を神にした代表的の物語をして居る。「濱口五兵衛といふはたしかに居つた人である。彼は其の村の村長であつたが、其の村人をば海嘯の難から救はんがために、即ち海辺から高地へ村人を引きつけるために、積藁に火をつけて、彼の米穀を犠牲にした。そこで彼等は濱口を神様だと呼び、濱口大明神と言つた。海嘯がすんで、彼等は古里に還つて、濱口の霊のために一堂を建て、金文字で書いた「濱口大明神」といふ額を掲げた。村人は彼を此処に祀つた、祝詞を奏し、供物もして。……濱口は小高い丘の上に藁葺の家に未だ生きて居るのに、丘の下の社殿では其の魂が祀られた。さうして、百歳以上の長寿を保つて彼は死んだ。併し今尚其の社があつて、此の良農の死霊を祀つてをつて、恐ろしき事、困

難事ある時には祈願をこめるといふことである。」と書いて居る。（五九～六〇頁）

第三章において「自然神と団体の中心人物とを祖先と呼ぶ」日本の疑似祖先崇拝の状況を扱った際には、次のように岡倉天心（覚三）『東洋の理想』やイギリスの哲学者エドワード・ケアードのギフォード講義『宗教の発展』に示唆を得た記述がみられる。

近頃出た岡倉君の『東洋人の理想』の中に、伊勢出雲の子孫の純粋なことをのべてゐる。此の二所に祀つてゐるいはゆる先祖の神は、即ち日の女神、食物の女神、大名持命（一つの地神）、須佐男命（暴風雨の神）である。Dr. E. Caird の説に「多くの場合に崇拝せられて居るものは崇拝者の先祖であるが故に、神と思はれるのではなくて、彼等の神であると信ぜられるから、彼等の先祖だと思はれるのだ。」といふのは、神道の此の様子に当つてゐる。（六二～六三頁）

この他、これまで確認してきたように、スペンサーの社会学の成果が参照されていること、古代神道に関する記述が充実していること、神道を農業国的宗教と捉えていること、日本の民俗に関心を寄せて観察していること、そして本居宣長や平田篤胤の国学研究の成果を評価し、活用していることなどが本書に見られる特色といえる。さらに筆者がかねて指摘してきたように、アストンの神道論は新渡戸稲造や加藤玄智、さらにはＧＨＱの神道観に顕著な影響を与えたことも重要であろう。(7)

今後もこのような近代日本の国際交流を念頭に置いた調査を、出来る限り継続したいと思う。

注

（1）楠家重敏『W・G・アストン――日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』、雄松堂出版、二〇〇五年、八九～九二頁。

（2）Aston, W. G., *Shinto, the Way of the Gods*, London, Longman, 1905.（ダブリュー・ジー・アストン著、補永茂助・芝野六助訳『日本神道論』、明治書院、大正十一年。ウィリアム・ジョージ・アストン著、安田一郎訳『神道』、青土社、一九八八年）

（3）明治神宮社務所「加藤玄智編『明治・大正・昭和　神道書籍目録』」リーフレット。

（4）林博太郎「序」（加藤玄智編『明治・大正・昭和　神道書籍目録』、明治神宮社務所、昭和二十八年）。

（5）加藤玄智「序」（加藤玄智編『明治・大正・昭和　神道書籍目録』）。

（6）Genchi, Kato, et al, eds., *A bibliography of Shinto in Western languages, from the oldest times till 1952*, Tokyo, Meiji Jingu Shamusho, 1953, pp.2.

（7）拙著『明治聖徳論の研究――明治神宮の神学』（国書刊行会、平成二十二年。第十章「近代の神道・日本研究と明治天皇論――加藤玄智を中心に」）。拙稿「新渡戸稲造における維新と伝統――神道論・日本論を手がかりに」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊四五、平成二十年）、「GHQの神道観に関する一考察――『日本の宗教』を介して」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊四八、平成二十三年）、「アメリカの神道観に関する一考察――ロバート・O・バーロウ『神道』の紹介」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』六、平成二十四年）。拙著『明治聖徳論の研究』（三五八頁）でも指摘したように、加藤玄智のほかに村岡典嗣がアストンの『倭論語』研究に関心を示していた（村岡典嗣『神道史』、創文社、昭和三十一年、一〇七～一一一頁）。また丸山眞男が「日本政治思想史」講義において「祖先崇拝の問題」を扱い、アストン『神道』が「日本における祖先崇拝は中国からの輸入」と指摘したことを「卓見」と評価している（丸山眞男『丸山眞男講義録　第七冊　日本政治思想史　一九六七』、東京大学出版会、一九九八年、八九頁）。これら思想史学者の神道論については他日の課題としたい。